

「おめでとう、恵まれた方」
ルカによる福音書 1 章 26-38 節

今日、読まれた聖書箇所は、「受胎告知」としてよく知られている物語です。天使ガブリエルがマリアに現れて言います。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる」。さらに天使は「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みを頂いた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。」とも言います。

天使は「恐れることはない」と言います。しかし、マリアにとってこれほど恐ろしい話はありません。確かに、夫婦の間に子どもが生まれることは、間違いなく喜ばしい知らせです。そしてそれが長らく待ち望んでいた待望の子であったのなら、なおさらでしょう。でも、マリアの場合は、婚約者のヨセフの知らないうちに妊娠するという悲惨な告知としてそれが与えられたのです。

そのことは、ヨセフとの結婚が破談になるだけではありません。ひとたびヨセフが告発したならば、彼女は姦淫の罪を犯した女として、石で打ち殺されるという刑罰を免れることは出来なかったでしょう。さらに、それだけではありません。イエスと名付けられたその男の子は、十字架にかけられて殺されてしまうことになる。将来、その姿をマリアは見る事になるのです。そんな苦しみが待っているのです。そのようなマリアが全く思ってもみない人生を天使は携えて来たのです。それなのに、この天使は「おめでとう、恵まれた方」と言うのです。マリアが願ってきたことを台無しにするような事態を運んできておきながら、「おめでとう、恵まれた方」なんて言うわけです。「冗談じゃない。ふざけんな！」私だったら、そう言って天使を罵倒してしまうかもしれません。

では、マリアは不幸な人だったのでしょうか。そうではないことを私たちは知っています。確かに、救い主の母としてマリアは苦悩に満ちた人生を歩きました。赤ん坊が生まれる時には泊まる場所がなく、家畜小屋で出産することになりました。しかも、生まれた子がヘロデ王に命を狙われることになって、エジプトに逃れることを余儀なくされました。後になると、息子のイエスは長男であるにもかかわらず家を出て行ってしまいました。そしてその数年後、マリアは十字架上の息子のもとにたたずむことになるのです。マリアの生涯は苦難に満ちていました。しかし、マリアは不幸な人として一生を終えたわけではありません。

それでは、どうしてマリアは「恵まれた人」なのでしょうか。苦悩に満ちた人生であっても「おめでとう」と言えるのはなぜでしょう。なぜなら、天使はマリアにこう告げたからです。「主があなたと共におられる」。

「主が共におられる」「神さまが共におられる」、私たちもしばしば口にしますし、耳にします。悲しんでいる時に主が共にいて慰めてくださる。危機に瀕する時に主が共にいて守ってくださる。もちろん、そうです。けれども、ここで語られていることの本質は、そう

ということではありません。ここでの「主が共におられる」というのは、「マリアを用いようとしている主が共におられる」ということです。

神さまがこの私の人生を用いてくださる。そうであるならば、たとえ苦難があったとしても、たとえ自分が望んだように人生が展開しなかったとしても、それは必ずしも不幸を意味しない。神さまがその人生を用いてくださるならば、私たちの一生は、本当に価値あるものとして輝くことができると思うのです。

天使はマリアに言いました。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる」。その言葉をマリアは信じました。たとえ何が起ころうとも、神さまが私の人生の責任を負ってくださる。そのことを信じ抜きました。それゆえに、マリアの人生は、主が共におられた人生として、主に用いられた歩みとして「恵まれた人」となったのです。

しかし、この天使の言葉は、マリアだけに告げられたものではありません。クリスマスを迎えるすべての人たちに対して、天使はこう告げています。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる」。

今日、私たちもこの言葉を聞く者でありたいと願います。